

逸翁美術館についての一考察

塩田昌弘

要旨

明治・大正・昭和を通して、実業界で活躍し、阪急電鉄、阪急百貨店、東宝映画、宝塚歌劇、阪急ブレーブス、コマ・スタジアム、逸翁美術館、マグノリアホール、池田文庫、小林一三記念館等の創設の基礎にその才能・才覚を発揮した不世出の実業家・小林一三（1873～1957）について紹介する。

特にこの小論では、小林一三の成した事業のうち、文化・美術方向を中心に逸翁美術館に焦点をあて論考しようと思う。本来、事業はそれを成した人の人格の反映と考えられる。後年、今大閤と言われた小林一三であるが、幼年期は、愛情の薄い家庭に育った。だが、その小林一三がどの様にして、その才能を開花させていったのか。小林一三の志とは何か、逸翁美術館成立の礎となったコレクションを貫流する美とはどの様なものか、これらについて考察する。

キーワード：小林一三、逸翁美術館、阪急

〔目次〕

はじめに

I. 逸翁美術館の生成

II. 小林一三の風姿

III. 小林一三の生涯

おわりに

図版

注と参考文献

はじめに

逸翁美術館の逸翁とは、小林一三の雅号から付けられた。小林一三は、近代日本が生んだ独創的で華やかな経営者である。阪神急行（阪急）電鉄、日本軽金属、東京電燈、東宝など一流企業のトップとなっただけでなく、商工大臣などもつとめ、その一方で多くの著作をものにし、茶人、コレクターとしても名をなして、「今太閤」と呼ばれた¹⁾。さらに、宝塚歌劇の創立、阪急百貨店、沿線宅地開発・分譲、阪急ブレイブスなどの経営でも才覚を表した経営者として知られている。本論では、近代日本の創業者と言える小林一三の業績とその事業の発想の源を明らかにし、さらに美術館経営と社会への「還元性」について考察したい。

I. 逸翁美術館の生成²⁾

財団法人逸翁美術館は、小林一三翁（1873.1.3～1957.1.25）の雅号「逸翁」を冠して館名とし、1957年10月から2008年3月までの間、翁の旧邸「雅俗山荘」をそのまま展示の場として美術館の業務を行っていたが、開館50周年を期に新たに現在の地に新美術館を建設し、2009年10月に開館した。

小林一三翁は、明治6年、山梨県韮崎市（現在）に生まれ、明治・大正・昭和に実業界で活躍し、阪急電鉄をはじめ、阪急百貨店、東宝などの阪急東宝グループを興し、太平洋戦争直前の難局に商工大臣を、戦後の混乱期に国務大臣復興院総裁を歴任した。また、宝塚歌劇の創設と、演劇・映画における芸術活動、「小林一三全集」七巻におよぶ著述や茶道の活動をされた。

美術館の生成については、小林は早くから「一都市一美術館論」を提唱していた。『小林一三全集』第一巻（新茶道、七 文化財保護法をめぐるて、p.536～p.537）に次の様に述べている³⁾。

若しこの種の美術館を地方地方に奨励する国家の方針が確立してあるならば、今頃は立派な小美術館が設立され、その地方人の多数はどれだけ恵まれた潤いのある生活に親しむ機会が与へられて、将来どういふ美術工芸家の卵が生れないとも限らないと思ふ。いろいろの美術工芸品に興味を持って生活を楽しんでゐる人は随分沢山に存在してゐるので、これ等の人達は、国家の博物館、美術館が如何に声を大にして開放を叫ぶとしても、硝子越しに觀賞する自由を与へられるだけでは、新人の育成には不十分であるといふ実情を知らなければ駄目だ。凡そ、ものの発芽の胎動、成育の機微といふが如きインスピレーションの美のささやきは、コレコレと尺度を以って計画的に出来上がるものよりも、より以上の神秘的幽妙の力によって培養されて現れるものである。学校教育の力は何人も疑はない。が同時に、天才的偉人の出現は必ずしも学校教育のみに限らない。帝大も必要であれば、松下村塾も必要である。教育の要は、信頼と、親愛と、感化が重点である。美術思想とその実現的行為は、信頼と親愛と感化と、美の世界に浸り得る環境が必要で、この点に於いて、国家的博物館、美術館等よりも、地方的存在の如何に、それが貧弱であるとしても、温か味があり、打てば響く底の親しみを持つ環境が偉大の効果のある点を私は強調したいのである。即ち、この点に於いて、私は国家の力よりも、国民の力の方がエライものだと信じてゐる。(中略) 国民の力とは、個人の力を充分に利用して醸酵せしむる力である。個人の力の範囲内には、純、不純、時には我利私慾もあるであらうが、美術品の蒐集といふが如き趣味生活の結晶が、やがて自己の道楽を離れて社会性、公共性に順応する時が来たならば、大なり小なり、自己を捨てて、社会公共への奉仕に変わりゆくものである。

小林一三は、大衆と共に生きた実業家と言われるが、以上の論点には人間の心の底にあるいわばその人間を行動せしめる何か、魂のようなものを理解していた実業家であり、人間通であつた人と言えるであろう。どの様にしてその能力を持ちえたのか。それは、幼年期の両親との別離の体験から、自然と身に付いた洞察力であつたと考えられる。

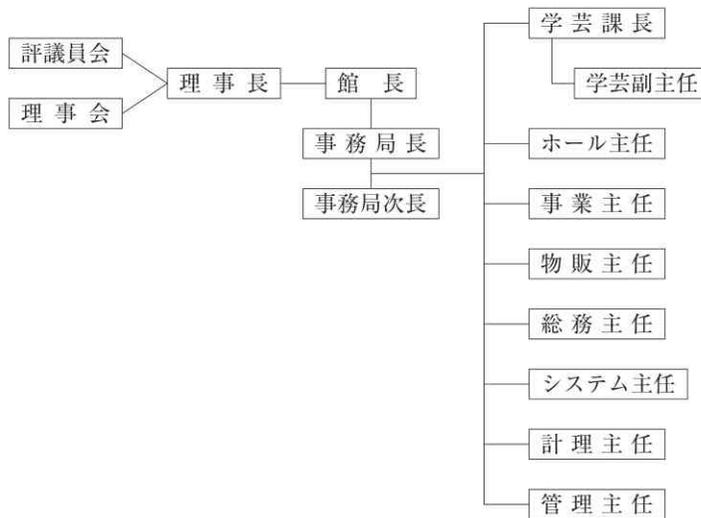
〈逸翁美術館の主な館蔵品〉⁴⁾

館蔵の美術工芸品5000余点は、古筆、古経、絵巻、中近世の絵画（特に蕪村・呉春・円山四条派のコレクション）、国内はもちろん中国・朝鮮・オリエント・西洋を含む陶磁器、日本・中国の漆芸品に及び、茶人逸翁の美術への想いと茶道への深い理解を語るものである。全体を通じて書画約1600点、陶芸品約2500点、その他1000点、うち重要文化財15点、重要美術品19点が所蔵されている。

重要文化財 豊臣秀吉画像画稿 狩野光信筆

- 一幅 桃山時代
重要文化財 佐竹本三十六歌 仙切藤原高光
一幅 鎌倉時代
重要文化財 奥の細道画卷(部分) 与謝蕪村筆
江戸時代
重要文化財 白梅図屏風 六曲一双 呉春筆
江戸時代
重要文化財 谷水帖 石山切 伊勢集
平安時代
重要文化財 花鳥蒔絵螺鈿櫃
桃山時代

〈組織機構〉



〈建設概要書〉

- 工事名称 : 逸翁美術館移転新築工事
建設場所 : 池田市栄本町2031-7
土地所有者 : 阪急電鉄株式会社
敷地面積 : 1,872.76m² (実測面積)
建築面積 : 1,094.93m² (建ぺい率 : 58.47% < 60%)
延床面積 : 2,377.43m² (容積率 : 101.56% < 200%)
構造規模 : 鉄骨鉄筋コンクリート造 地下1階、地上2階建て

逸翁美術館についての一考察

駐車場 : 26台 (地下23台、地上3台)

工期 : 2008年2月25日～2009年3月28日

(主要室面積表)

室名	面積	備考
(1階営業部門)		
エントランスロビー	158m ²	受付共
展示室	373m ²	ケース・倉庫・前室共
ホール	99m ²	140席
喫茶室	58m ²	厨房共
ミュージアムショップ	20m ²	
茶室	35m ²	水屋共
(2階管理部門)		
収蔵庫	322m ²	調査研究室共
事務所	147m ²	会議コーナー共
理事長室	11m ²	
館長室	11m ²	
応接室	12m ²	
(地階)		
駐車場	557m ²	23台収容

〈建物仕様書〉

(外部仕様)

- 屋根 : アスファルト露出断熱防水
 外壁 : セラミックスボーダータイル 一部コンクリート打放し
 開口部 : アルミサッシ (焼付塗装)
 ピロティイ : 磁器質タイル
 テラス : 木製デッキ

(外構仕様)

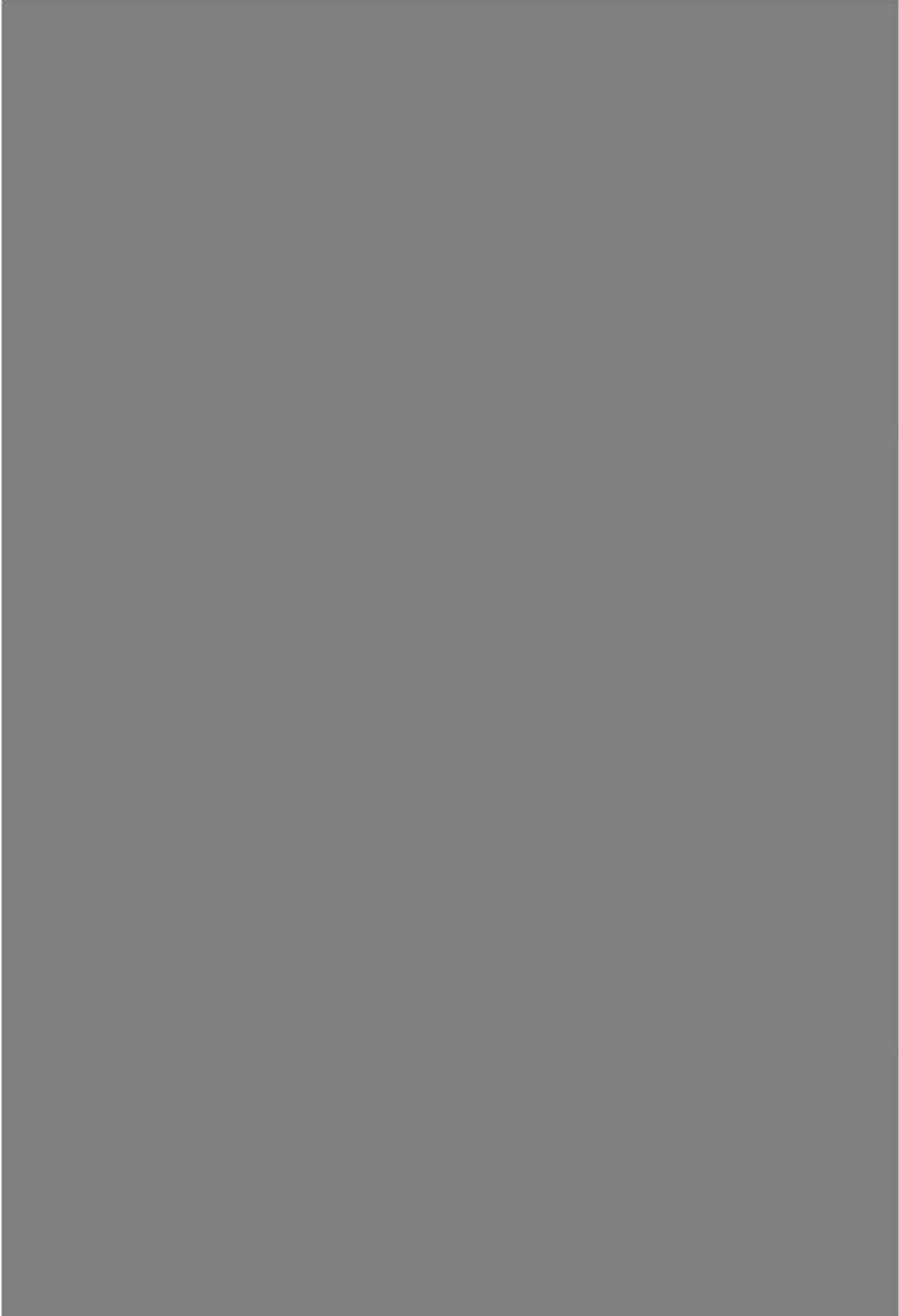
- 門扉 : ステンレス製 (ジャバラ式、自動)
 塀 : コンクリート打ち放し及びネットフェンス
 植栽 : 既存樹木及び新植樹木

(内部仕様)

駐車場	: 床、塗床材塗布 一部磁器質タイル
エントランスロビー	: 床、木製フローリング 壁、ボード塗装 天井、ボード塗装
展示室	: 床、タイルカーペット 壁、ビニールクロス 天井、岩綿吸音板
ホール	: 床、タイルカーペット 壁、ボード塗装 天井、ボード塗装
収蔵庫(1)	: 床、木製フローリング 壁、湿度調整ボード 天井、岩綿吸音板
収蔵庫(2)	: 床、木製フローリング 壁、杉板貼 天井、杉板貼
事務所他	: 床、タイルカーペット 壁、ビニールクロス 天井、化粧石膏ボード

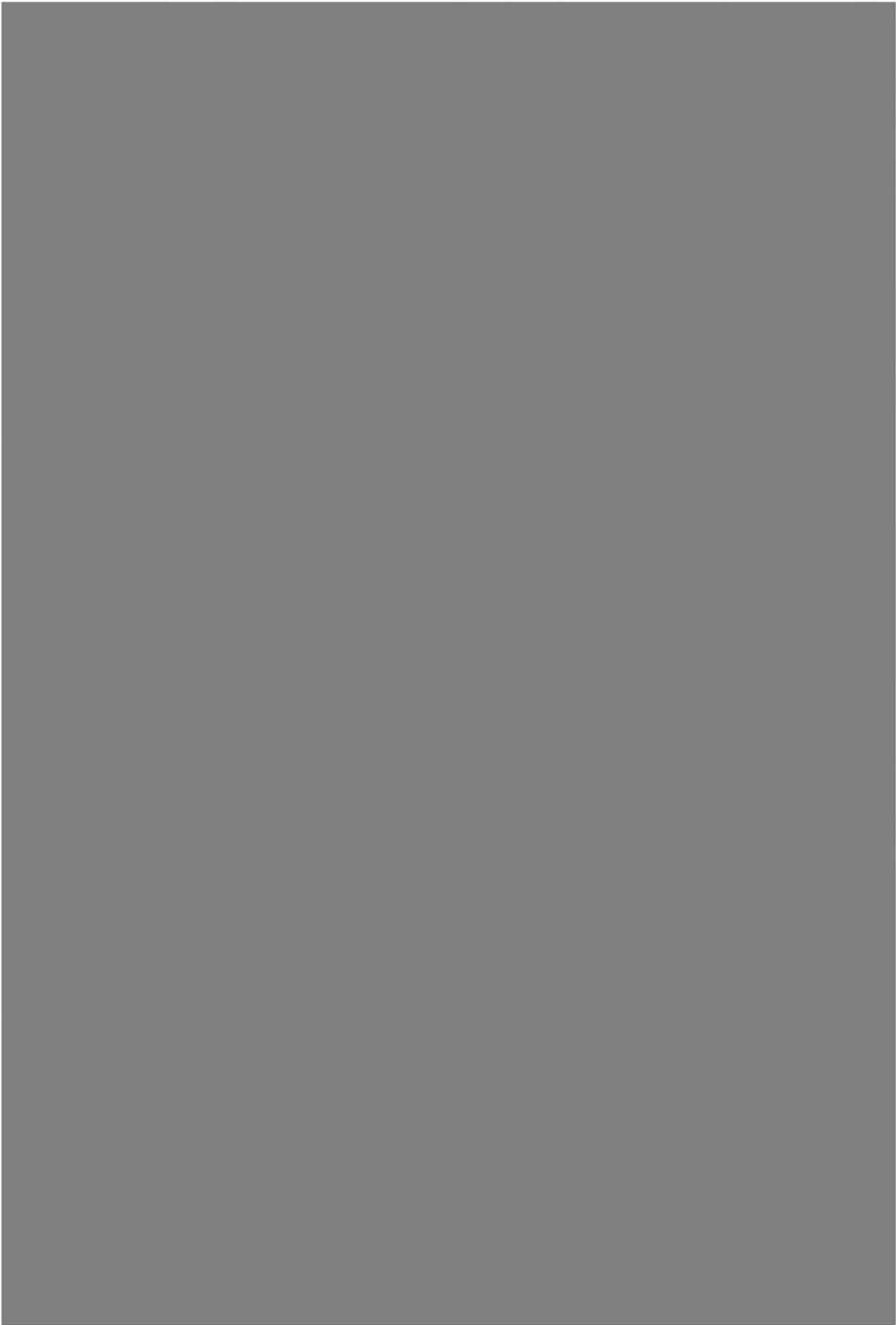
(設備仕様)

電気設備	: 高圧受電 (6,600V)、屋外式キュービクル受変電設備 動力 3φ3W 200V 電灯 1φ3W 200V/100V 電灯コンセント設備、照明器具設備、防災設備 弱電設備 (ITV、インタホン、放送、TEL、TV、LAN、防犯用空配管) 駐車管制設備
給排水衛生設備	: 上水道引込 40φ 直圧給水方式 下水道放流 150φ 自然放流方式 消火設備 建物全体: 屋内消火栓設備、 収蔵庫: ガス消火設備 客用便所、楽屋便所、従業員便所内各種衛生陶器、器具設備 屋外植栽灌水設備
空調換気設備	: 熱源方式 電気式空冷ヒートポンプパッケージエアコン 空調方式 展示室、ホール、収蔵庫: 単一ダクト方式 1階パブリックスペース: 天井埋込ダクト型室内機 1階バックスペース、2階: 天井カセット型室内機 換気方式 居室: 全熱交換器による第1種換気方式
昇降機設備	: 客用 750kg 11人乗 1基 人荷用 1,400kg 21人乗 1基





逸翁美術館についての一考察



建築関係資料及び図面は、逸翁美術館の資料提供による。

Ⅱ. 小林一三の風姿

薬師寺管主で、小林一三と交友があった橋本凝胤は『小林一三翁の追想』の中で「逸翁奇智⁵⁾」と題して小林一三について述べている。

瘦身短軀渾身是れ智恵とでも言う逸翁、これが今太閤と言われる小林一三翁である。慧眼は衆を押し眼光凛々として人をして恐れを抱かしめ、白髪童顔、亦能く人を容れ、柔軟硬直を兼ね備えた性格の所有者であった。

さらに続けて、その交遊関係は、経済界の重鎮に彩られている。

私が小林翁を知ったのは今から二十数年以前のことである。東京で仏教を聞く会を持ちたいと言う松永耳庵翁の発起で、金水に於いてお茶を呑みつつ話をする会をつくられた。会合した面々は石井光雄翁、服部玄三翁、畠山一清翁、故五島慶太翁、篠原三千郎翁、それに小林翁その他二―三の人である。世話人は平山堂主人齋藤利助翁であった。皆さん若かりし頃、何れも六十代の第一線にある最高峰の地位の人々、その中一番若いのが服部翁であったように思う。毎月、日を決めて東上し、大抵金水を利用したが、或時は八百三を利用した。然し私の話はむしろアクセサリーで、大体は美術品の話と政治、経済談が多く、或時は近松門左衛門の日記一冊を切って頒ったこともあり、熊野懐紙を頒けて印金の表装をする印金入手の話、或時は戦前の経済統合の時代であったので三越と阪急の合併の気運があり、三越の株券を買占めることを五島氏に命じられたこともあった。当時五島氏は小林さんから見れば後輩らしいので、買占めの方法を授けられたこと、又は地下鉄の株を買占めることを命じられたこともある。こうした話は私にとって、どれも珍らしい話ばかりであった。皆様は又、仏教の話を楽しそうに聞いておられたものである。

以上の橋本凝胤の文意から、小林一三が政治、経済、文化、宗教など多彩な分野に興味を持つ人格の人で、単に経済界で覇をとるだけに留まる人でないことを暗示している。

その洞察のとおり、小林一三は、この世に阪急ブランドという光輝く事業を形成した。現在、「阪急」は不景気の中、一人勝の企業という思いがする。

阪急電鉄、宝塚歌劇、阪急百貨店、東宝映画、逸翁美術館、小林一三記念館、池田文庫、阪急西宮ガーデンズ等枚挙にいとまがない程、多種多様である。特に、新装となった梅田の阪急うめだ本店の9階・祝祭広場は、イベントを企画するが、その都度、多く

の客がフロアーをとり囲み、照明や展示効果も抜群で、その賑わいは、さながら錦絵の芝居を見ている様な華やかさがある。まさに、大衆と共に楽しみ、営業を伸ばしていることが理解できる。この様な発想はどこから来るのか。それは、小林一三の生い立ちにその秘密があるように思われる。

Ⅲ. 小林一三の生涯⁶⁾

この年譜は、小林一三著『逸翁自叙伝—青春そして阪急を語る』昭和54年7月20日初版、阪急電鉄株式会社発行の年譜p.267～p.303を参考にし、塩田が適宜必要な部分を選び書き写したり、自由に抜粋した。

- 1873年（明治6）、1月3日、山梨県北巨摩郡韮崎町（現在韮崎市）2402番地に生まれ、その月日より一三と名付けられた。韮崎は甲州街道の宿駅として発展し、甲信二州の米の集散地として知られ、豪商軒を連ねる中で、小林家は布屋と称し、酒造業・絹問屋などを営み、家格並び立つものの少ない富商であった。その家系に就いては、後年、翁自ら自家の過去帳に次の如く記している。

本家相続人タル長男維清（俳人欽哉子）ハ、三十六歳ニテ一女兒ヲ遺シテ逝去、次男維賢ハ保坂家へ養子（安政六年十二月死去）、三男維明（編註、翁の祖父小平治）ハ中宿へ別家シタルガ為ニ、本家ハ末弟四男維百ニヨッテ相続サル。然ルニ別家シタル三男維明モ亦二女ヲ遺シテ死去、時ニ慶応二年七月也（同人妻ハ早ク既ニ文久元年逝ク）。茲ニ於テ、長男維清未亡人ト其兒女ヲ維明ノ家敷ニ引移ラシメ、維明ノ孤兒二女、姉きくの（編註、翁の母堂）ハ本家ニテ（妹松代ハ清水家へ養女）、維百夫妻ノ手ニヨッテ養ハレ、成長ノ後、丹沢家ヨリ養子ヲ迎ヘテ、姉竹代ト一三ノ二兄ヲ遺シテ明治六年八月二十二日死去、養子ハ離縁、ココニ、二代ノ孤兒本家ニ養ハル。

昭和二十四年二月十一日記

逸翁

-
- 1875年（明治8）祖父、小平治維明の立てた別家の家督を相続。
-
- 1878年（明治11）寺小屋の名残りを留める蔵前院（寺院）の公立小学韮崎学校（第一大学区、第四十三中学区、第四十一番小学）下等小学第八級へ入学。
-
- 1880年（明治13）公立小学韮崎学校の校舎新築成り、蔵前院より移る。普通小学第七級在学。
-

- 1885年（明治18）12月16日、小学高等科卒業。
-
- 1886年（明治19）東八代郡南八代村の加賀美嘉兵衛氏家塾、成器舎に入って寄宿生となり、英数国漢等、当時の最も進歩的な教育を受ける。
-
- 1887年（明治20）夏、腸チフスにかかり、成器舎を退学。
-
- 1888年（明治21）2月13日、慶応義塾に学ぶため初めて上京。14日、入学試験を受け即日入学。塾監益田英次氏の寄宿舎に入る。16日、入学早々、学校ストライキ起こり、3月7日、終る。同寮の者に、摂津大掾の息二見文次郎、鴻池新十郎氏らがあった。9月17日、本塾の童子寮に移り、寮誌「寮窓の灯」の主筆となる。鈴木島吉氏（興銀総裁）、磯村豊太郎氏（三井物産専務）らが同寮者中の上級生であった。
-
- 1890年（明治23）外塾と呼ばれた崖下の寄宿舎に移る。4月4日、麻布の東洋英和女子学校校長ラージ氏殺害事件起こる。小説家志望の熱がたかまった頃で、直ちにこの事件に材を取り、小説『練絲痕』を執筆。4月15日より25日までの間、九回にわたって「山梨日日新聞」に連載。ペンネームは霽溪（IK）学人とする。しかるに事件後、余りに短時日だったので、麻布警察署より取り調べられるなど、思わぬ結果を生じた為、遂に執筆を中止する。この頃芝居に興味を持ち、観劇を重ねて劇通となり、国民新聞より劇評を依頼され、『歌舞伎座に劇評家を見るの記』を書くも、没書となる。
-
- 1892年（明治25）12月23日、慶応義塾を卒業。25日、故郷葦崎へ帰る。
-
- 1893年（明治26）正月早々、葦崎を發し、鰯沢より富士川を下り、岩淵より汽車にて熱海に着く。当時、上毛新聞に小説『お花団子』を連載し慶応義塾の先輩で大阪毎日新聞創立に功のあった渡辺治（台水）氏と共に都新聞に入社の筈であったが、渡辺氏の毎日退社が実現せず、従ってこの話も中止となった。4月4日、三井銀行入社。十等席（ママ）の資格で、駿河町角屋敷の東京本店秘書課勤務となる。月給13円。7月、三井銀行は合名会社となる。銀行総長三井高保氏、常務理事（後、専務理事と改める）中上川彦次郎氏。9月16日、大阪支店に転勤、金庫係を命ぜられ、手代五等となる。支店長は慶応先輩で、文学の上でも先輩だった箒庵高橋義雄氏。11月、文学雑誌「この花双紙」に短編『平相国』を発表。高山樗牛の同名のエッセイが書かれたのは、これより約十年後である。
-
- 1895年（明治28）9月、岩下清周氏、三井銀行大阪支店長として赴任。
-

- 1896年（明治29）9月、岩下氏、三井銀行を辞任し、北浜銀行設立を企画。後任として上柳清助氏が支店長となり、次長に池田成彬氏赴任。12月9日、預金係となる。日清戦争の好景気反動の時期で金融逼迫し、小恐慌的波瀾が大阪支店にも及んだ。この年、阪鶴鉄道、神崎（現在、尼崎）―宝塚間開通（明治32年7月、福知山まで全線開通）。

- 1897年（明治30）1月、名古屋支店に転勤。支店長は平賀敏氏。14日、岩下清周氏、北浜銀行を設立し2月15日、開業。9月、友人達と「名古屋銀行青年会」の設立を企画する。

- 1899年（明治32）8月、大阪支店に転勤。

- 1900年（明治33）10月、丹沢コウ女と結婚。
- 1901年（明治34）1月、単身東上。箱崎倉庫主任の辞令は一夜にして変更され、次席となる。
- 1903年（明治36）5月7日、長女とめ嬢出生。
- 1904年（明治37）11月18日、二男辰郎氏出生。
- 1906年（明治39）1月15日、箕面有馬電気鉄道（後に軌道）株式会社創立発起人会設立される。4月28日、大阪―箕面―有馬間、宝塚―西宮間電気軌道敷設を申請する。この年、三井物産の重役飯田義一氏並に北浜銀行頭取岩下清周氏より、高徳蔵氏の株式仲買店を買収して株式会社となし、その支配人となるよう懇望される。

- 1907年（明治40）1月23日、三井銀行を退職。新設の証券会社の支配人となるため、一家を挙げて来阪する。しかるに、到着のその日より日露戦後の好景気の反動暴落が始まり、証券会社設立は不可能となった。天王寺烏ヶ辻の藤井別荘の一軒を借り、同じ園内の本屋には平賀敏氏一家が住まう。4月、三井物産常務飯田義一氏の推選により、阪鶴鉄道監査役となる。6月30日、箕面有馬電気軌道株式会社創立の追加発起人となる。8月1日、阪鶴鉄道は国有となり、監査役を辞任。10月19日、大阪商業会議所に於て箕面有馬電気軌道株式会社の創立総会を開催、専務取締役就任。

- 1908年（明治41）10月1日、箕面有馬電気軌道株式会社の電灯電力供給事業認可を申請する。19日、岩下清周氏、同社社長に就任。22日、大阪―池田間及び箕面支線並びに池田―宝塚間工事施行認可される。この月、「最も有望なる電車」という宣伝パンフレット発行。日本最初のPR冊子である。
- 1909年（明治42）3月3日、箕面有馬電車支線、梅田―野江間（野江線）軌道敷設の件特許される。30日、沿線住宅地経営のため、池田に用地27,000坪を買収。8月14日、野江線敷設に関し、大阪市と契約を締結。18日、三男米三氏出生。

- 1910年（明治43）2月22日、箕面有馬電軌の第一期工事として、梅田—宝塚間24.9軒、石橋—箕面間4軒竣工。同日、大阪市との野江線に関する契約は疑獄事件に発展、又、岡町登記所登記官買収に責任ありとされ、両事件の取り調べのため、予審判事の令状を執行され拘引される。24日、野江線問題に関し、松永安左エ門氏、福岡にて拘引される。28日、松永氏釈放。3月3日、翁も釈放され、登記官買収の件では罰金30円、野江線問題では共に不起訴となる。これが責任をとって、同日、専務を辞任する。3月4日、電灯電力供給事業の経営許可される。10日、宝塚線・箕面支線営業開始。13日、池田車庫にて開業祝賀式を挙げる。7月1日、日本では初めての社債200万円（第一回無記名利札付）を発行。現物間屋、黒川・竹原、特に野村商店の努力により売切れる。11月1日、箕面動物園を開く。
 - 1911年（明治44）5月1日、宝塚新温泉の営業開始。10月6日、箕面動物園に於て山林子供博覧会を開催（電車の誘客を目的とするこの種の催しとして日本最初）。
-
- 1912年（明治45／大正元）2月28日、宝塚—有馬間及び宝塚—西宮間の軌道敷設工事施行認可される。7月1日、宝塚新温泉内に新館パラダイスを開設。
-
- 1913年（大正2）5月1日、豊中運動場完成（大正4～5年、大阪朝日主催第一～二回全国中等学校優勝野球大会を開催）。7月1日、宝塚唱歌隊（後に少女歌劇、更に歌劇団と改称する）を組織する。
 - 1914年（大正3）4月1日、宝塚新温泉パラダイス劇場に於て、宝塚少女歌劇第一回公演を開く。8月20日、豊中住宅地（五万坪）売出しを開始。10月1日、宝塚少女歌劇秋季公演開始、自作の歌劇『紅葉狩』を上演する。
 - 1916年（大正5）3月31日、箕面動物園廃止する。
-
- 1917年（大正6）12月、朝日新聞社長村山龍平氏、住友総本店総理事鈴木馬左也氏、鐘紡社長武藤山治氏など旧住吉村の別荘地帯の住人から、神戸線予定線について一部を地下鉄に変更させる運動が起った。その結果、村山邸附近を迂回する路線に変更。
-
- 1918年（大正7）2月4日、箕面有馬電気軌道株式会社を阪神急行電鉄株式会社と社名変更（略称、阪急電車）。12月、宝塚音楽歌劇学校創立認可され、校長に就任。
 - 1919年（大正8）3月17日、宝塚新温泉に歌劇新劇場竣工（箕面公会堂を移転改築したもので公会堂劇場と呼ぶ）。
-
- 1920年（大正9）7月16日、神戸線本線（30.3軒）並びに伊丹支線開通営業開始。「新しく開通した神戸（又は大阪）ゆき急行電車、綺麗で、早うて、ガラアキで、眺めの素敵によい涼

しい電車」という今も語り草になる新聞広告はこの時のものである。11月1日、大阪市角田町（梅田）に阪急ビルディング（旧館、五階建）竣工。5日、阪急ビル二階に食堂を開設、三―四―五階は事務所とし、一階は白木屋に貸して日用雑貨を販売させた。

• 1921年（大正10）3月1日、岡本住宅地（一万八千坪）の売出しを開始する。

• 1922年（大正11）6月15日、宝塚野球場竣工。28日、新京阪鉄道株式会社（現在の阪急京都線）創立総会開催。

• 1923年（大正12）1月3日、宝塚新温泉は浴場を残して、劇場・パラダイス・食堂等全焼する。3月11日、甲東園住宅地（一万坪）売出し開始。8月15日、宝塚新温泉パラダイス及び洋食堂完成。

• 1924年（大正13）2月6日、新淀川神戸線鉄橋竣工。25日、日本最初の職業野球団宝塚運動協会設立。6月12日、新淀川神戸線鉄橋開通。宝塚少女歌劇に新たに雪組を編成。7月19日、小林翁の抱懐していた大劇場主義を実現する4000人収容の宝塚大劇場が竣工した。月・花組合併柿茸落公演開始（9月2日まで）。7月25日、株式会社宝塚ルナパーク開業。10月、東京横浜電鉄株式会社監査役に就任。25日、阪急電鉄は資本金を三千万に増資。12月27日、大阪市内高架線建設工事に着手。

• 1925年（大正14）4月、『日本歌劇概論』出版。5月2日、株式会社宝塚ホテル設立。6月1日、阪急ビルの2階と3階に直営マーケット開業。食堂は4階と5階で営業。日本最初のターミナルデパートである。9月10日、阪急電鉄社長平賀敏氏辞任。12月、目黒蒲田電鉄株式会社監査役に就任。

• 1926年（大正15／昭和元）1月、『続歌劇十曲』を出版。4月20日、宝塚国民座結成される。坪内士行・川口尚輝・堀正旗の演出陣に、森英治郎・出雲美樹子等の俳優が入団した。5月8日、中劇場に於てその第一回公演開始。7月5日、大阪市内高架線の運転を開始する。これにより大阪―宝塚間運転時分、45分を42分に、大阪―神戸間40分を35分に短縮。11月、第一生命保険相互会社の監査役に就任。12月18日、西宮―今津間開通し、西宝線を今津線と改称。

• 1927年（昭和2）2月1日、株式会社宝塚植物園設立。3月10日、阪急電鉄取締役社長に就任。7月28日、東京電燈株式会社取締役に就任。9月1日、宝塚大劇場の少女歌劇花組公演開始。日本最初のレビュー『モン・パリ』が上演され、斯界にセンセーションを起こした。11月17日、

大阪市角田町（梅田）に阪急ビル（新館）第1期工事起工。

- 1928年（昭和3）3月、東京電燈副社長に就任。4月、東電証券株式会社の取締役役に就任。10月22日、東電は東信電気会社と共同して、余剰電力の消化のため、昭和肥料株式会社を創立、その監査役に就任（同社は昭和14年、日本電工と合併して昭和電工となる）。

 - 1929年（昭和4）3月28日、梅田阪急ビル第1期工事竣工。4月15日、阪急百貨店開業、旧マーケットを発展的に解消。6月21日、阪急の神戸市内延長線地下式を高架式に変更の件許可される。7月10日、六甲山ホテル開業。8月28日、阪急自動車株式会社設立。

 - 1930年（昭和5）4月1日、大阪―神戸間に特急運転（所要時分30分）開始。9月19日、六甲登山架空索道株式会社（ロープウェイ）設立。10月、飯山鉄道株式会社取締役役に就任。11月24日、宝塚国民座を解散する。

 - 1931年（昭和6）2月2日、梅田阪急ビル第2期工事に着手。4月1日、東京電燈、東京発電を合併。25日、阪急電鉄資本金三千万円を四千五百万円に増資。11月1日、宝塚新温泉とルナパーク（動物園）・植物園との連絡橋を完成し、新遊園地を開く。

 - 1932年（昭和7）1月1日、宝塚文芸図書館開館。4月19日、三井・三菱・興銀等の金融団の斡旋により、五大電力会社は協調機関「電力連盟」を結成。6月、『雅俗山荘漫筆』第1巻出版。8月、第2巻発行。12日、株式会社東京宝塚劇場創立、取締役社長に就任。10月19日、阪急電鉄創立25周年祝賀会を開催、『阪神急行電鉄二十五周年史』発行。

 - 1933年（昭和8）1月、『雅俗山荘漫筆』第3巻を出版。4月20日、宝塚歌劇二十年記念祭開催。7月、池上電気鉄道株式会社取締役役に就任。8月2日、阪急電鉄の神戸市高架乗り入れ漸く神戸市会の承認を受ける。9月、『雅俗山荘漫筆』第4巻、『奈良のはたごや』の二冊を出版。11月25日、郷誠之助氏、東京電燈株式会社社長を辞任し、会長のみとなり、代わって社長に就任。

 - 1934年（昭和9）1月1日、東京宝塚劇場竣工、宝塚少女歌劇月組により柿茸落公演（31日まで）。1月8日、阪急電鉄社長を辞任し会長に就任（社長は空席とし、副社長に上田寧氏、専務取締役役に佐藤博夫氏就任）。この月、東宝劇団結成に乗り出す。2月1日、日比谷映画劇場を開場、入場料50銭均一の外画上映館として一新紀元を劃す。9月、東京高速鉄道株式会社監査役に就任。10月1日、池上電鉄は東横電鉄と合併につき取締役を退任。
-

- 1935年（昭和10）6月、内閣調査局参与を仰せつけられる。朝鮮電力株式会社取締役就任。9月12日、浅間丸にて横浜を出帆、欧米視察の旅につく。（9月25日、サンフランシスコ着。29日、ロスアンゼルス着。その後、ニューヨーク・ロンドン・ベルリンを経てモスクワ・レニングラードなどソ連国内を旅行。12月、ライン河沿いに中欧をたずね、スイス・オーストリア・ハンガリー・チェコスロバキアを歴遊し、12月30日、ベルリンに帰る。11年1月22日、ロンドンに來り、2月上旬、パリ。5日パリを去ってイタリアを訪う。3月13日、マルセユ発、榛名丸で帰国の途につく）9月、『私の行き方』を出版。

- 1936年（昭和11）1月23日、阪急職業野球団結成。2月26日、梅田阪急ビル第4期工事完成。4月1日、阪急電車神戸市内高架線竣工、終点は神戸三宮となる。4月17日、榛名丸にて欧米の旅より帰朝。6月1日、池田市五月山山麓に自邸雅俗山荘成る。26日、帝国劇場株式会社取締役就任。30日、東宝、PCL、JOの提携成り、東宝映画配給株式会社を設立。この月、『私が見たソビエト・ロシア』を出版。7月4日、東京電燈開業五十周年記念式典を挙る。この月、『産業は国営にすべきか』を出版。8月28日、上田寧氏、阪急電鉄社長に就任。10月4日、阪急電鉄会長を辞任（上田寧氏、社長を辞任）。同日、朝鮮電力取締役を辞任。7日、東京高速鉄道監査役を辞任。26日、阪急電鉄は資本金四千五百万円を五千五百万円に増資。社長に佐藤博夫氏就任。11月29日、目蒲電鉄、東横電鉄の取締役を辞任。この月、『次に来るもの』を出版。12月26日、東京電燈の会長を兼任、郷会長は相談役となる。

- 1937年（昭和12）1月1日、自作の『恋に破れたるサムライ』を宝塚少女歌劇月組によって東京宝塚劇場に上演、3月1日より同じく宝塚大劇場にて上演。7日、株式会社梅田映画劇場設立、社長に就任。9日、株式会社第一ホテル相談役に就任。この月、飯山鉄道社長に就任。2月27日、株式会社江東楽天地設立。4月、『映画事業経営の話』を出版。5月1日、阪急電鉄の西宮球場開設。中国・北京に旅行する。9月1日、写真化学研究所・PCL・東宝映画配給・JOを合併し、東宝映画株式会社を創立し、11日、相談役となる。24日、東宝は帝国劇場株式会社を吸収合併する。25日、内閣情報部参与を仰せつけられる。この月、『戦時国債発行解決策』を出版。10月22日、通信省臨時電力調査会第二回総会に於て、五大電力会社代表として電力統制案を提出する。12月、江東劇場（3日）・北野劇場（9日）・梅田映画劇場・同地下劇場（27日）それぞれ開場される。

- 1938年（昭和13）1月13日、南街映画劇場開場。この月、『電力問題の背後』を出版。2月28日、渋谷秀雄氏、東宝会長に就任。4月1日、第一ホテル開業。3日、江東楽天地（遊園地）開場。6月28日、東宝は株式会社後楽園スタジアムを經營することとなる。8月2日、財団法人東電電気実験所理事長に就任。9月6日、日本放送電株式会社設立委員を仰せつけられ

る。10月2日、宝塚少女歌劇訪独伊芸術使節団一行、靖国丸にて神戸出帆、ナポリに向かう。小林米三団長・天津乙女・奈良美也子・雲野かよ子以下45名。この月、『戦後はどうなるか』を出版。

- 1939年（昭和14）3月4日、宝塚少女歌劇訪独伊芸術使節団一行、伏見丸にて神戸に帰着。25日、株式会社三越取締役役に就任。30日、日本軽金属株式会社を設立、社長に就任。4月1日、日本発送電株式会社創立、理事に就任。4日、宝塚少女歌劇訪米芸術使節団、鎌倉丸にて神戸出帆、吉岡重三郎団長、渋谷秀雄総監督ほか小夜福子等一行60名。7月4日、訪米使節団一行、氷川丸にて横浜に帰着。7日、神戸着。この月、『事変はどう片づくか』を出版。10月7日、小田原急行電鉄株式会社取締役役に就任。27日、中央電力調整委員会委員仰せつけられる。11月13日、東電信濃川水力発電所新設第一期工事竣工する。17日、国際工業株式会社取締役役に就任。
-

- 1940年（昭和15）1月27日、華北電業株式会社理事に就任。3月15日、東京電燈の社長兼務を辞任し（会長はそのまま）、後任社長に新井章治氏就任。29日、日伊修交のため、並に両国間商議のため、日本代表者（所謂遣伊経済使節）を仰せつけられる（団長佐藤尚武氏、ほかに片岡安氏）。4月10日、神戸出帆の榛名丸にてイタリーに向かう。（イタリー滞在中の6月10日、イタリーの対英仏宣戦布告に会い、イタリーを離れて6月25日ベルリン着。7月4日同市を発し、6日モスクー、17日大連着。20日吉林丸にて門司に向かう）。7月21日、船中に近衛公より『途中より飛行機にて至急お帰り願う』の電報到着。22日、門司着、福岡より空路東京へ帰る。夜8時、近衛公に面会第二次近衛内閣の商工大臣になるよう話があり同夜のうちに親任式が行なわれた。同日、東京電燈会長、日本軽金属社長ほか関係各社の取締役・相談役・監査役及び東電電気実験所理事長、日本発送電理事等を辞任。8月1日、従三位に叙せられる。28日、蘭領印度特派使節に任命される。10月、「宝塚少女歌劇」を「宝塚歌劇」と改称。12月、『蘭印より帰りて』を出版。
-

- 1941年（昭和16）1月、岸信介商工次官辞任。後任は小島新一氏。27日、阪急電鉄は資本金五千五百万円を七千万円に増資。2月、前年末より開会中の第76議会に於て、小林商相の所謂「機密漏洩問題」起こる。この月、『蘭印を斯くみたり』を出版。4月4日、商工大臣を辞任。同日、貴族院議員に任ぜられる。6月17日、日・蘭印会商決裂。
-

- 1942年（昭和17）2月24日、財団法人東電電気実験所（8月31日改称して東電記念科学研究所）理事長に就任。31日、東京電燈、56年の歴史を閉じ、解散する。4月1日、関東配電株式会社・関西配電株式会社創立される。11月、『芝居ざんげ』を出版。
-

- 1943年（昭和18）10月1日、阪神急行電鉄（阪急電鉄）は京阪電気鉄道株式会社と合併し、社名を京阪神急行電鉄株式会社と変更。社長佐藤博夫氏、副社長佐藤一男氏。資本金七千万円を一億六千三八五万円に増加する。12月10日、株式会社東京宝塚劇場は東宝映画株式会社と合併、社名を東宝株式会社と変更。会長洪沢秀雄氏、社長大沢善夫氏。

- 1944年（昭和19）3月1日、第一次決戦非常措置令により、向う一カ年大都市の高級興行は五日限り一斉閉鎖を命ぜられ、東宝劇場・日劇・有楽座・帝劇・北野劇場・梅田映画劇場・宝塚大劇場等を閉鎖と決定。

- 1945年（昭和20）1月25日、京阪神急行は資本金一億六千三八五万円を二億八八五万円に増資。8月15日終戦。10月30日、幣原内閣の国務大臣に任ぜられる。11月、戦災復興院総裁に任ぜられる。

- 1946年（昭和21）2月5日、宝塚新温泉、大劇場その他諸施設を米進駐軍から返還される。24日、東宝劇場は進駐軍専用として接収され、アーニイパイルと改称。3月10日、公職を追放される。4月、国務大臣兼戦災復興院総裁を辞任。22日、宝塚大劇場再開、雪組公演で『カルメン』、『春のおどり』上演（5月30日まで）。5月、貴族院議員を辞任。7月15日、京阪神急行は資本金二億八八五万円を三億四千万円に増資。10月、『復興と次に来るもの』を出版。12月、『雅俗三昧』を出版。12月16日、オーエス映画劇場株式会社創立。

- 1947年（昭和22）1月28日、大阪市梅田にてOS劇場工事着工。3月25日、京阪神急行電鉄は百貨店部門の事業等を阪急百貨店に譲渡。4月1日、阪急百貨店は独立して営業を開始。日本劇場にて宝塚歌劇東京公演を再開（21日まで）。7月31日、OS劇場開場。

- 1948年（昭和23）4月8日、東宝は企業を合理化して再建に進むため、従業員1200名の整理を発表。26日、株式会社新東宝設立せられる（株式会社新東宝映画製作所の一切を引き継ぐ。資本金100万円、全額東宝出資）。30日、京阪神急行電鉄は資本金三億四千万円を六億円に増資。6月1日、東宝は撮影所を閉鎖。7月31日、東宝は新東宝との間に配給権について覚書を交換。8月19日、閉鎖中の東宝撮影所を占拠した日映演組合員が退去の意志を示さぬ為、仮処分を執行。10月19日、東宝争議妥結。

- 1949年（昭和24）6月、『逸翁らくがき』を出版。12月1日、京阪神急行電鉄の営業の一部の譲渡を受け、京阪電気鉄道株式会社発足する。京阪神急行電鉄は略称として『阪急電車』を使用する。

- 1950年（昭和25） 1月14日、東宝撮影所の自主製作再開。7月1日、東宝は帝国劇場を分離。11月3日、宝塚新芸座道場結成第一回公演を宝塚第二劇場（小劇場）に於て開く（13日まで）。

- 1951年（昭和26） 8月6日、公職追放を解除される。7日、東宝相談役に就任。9日、宝塚音楽学校校長に就任。30日、株式会社宝塚映画製作所設立。10月4日、東宝社長に就任。30日、宝塚歌劇『虞美人』は宝塚大劇場に於て8月以来の公演を終り、日本における続演の記録をつくる。12月、『新茶道』『仕事の世界』をそれぞれ出版。

- 1952年（昭和27） 1月、『私の人生観』を出版。9月30日、阪急不動産株式会社設立される。10月16日、秦豊吉東宝取締役を帯同し、欧米映画視察のため、羽田発、アメリカに向かう（18日サン・フランシスコ着、ロサンゼルスーハリウッドーシカゴーニューヨークーボストンーワシントンーバルチモア、11月22日ニューヨークを發して午後ロンドン着、パリーベルリンーローマ、12月22日ローマ発、日本に向かう）。11月8日、阪急電鉄、資本金六億円を十二億円に増資。12月25日、視察旅行を終えて羽田に帰着。

- 1953年（昭和28） 1月、週刊サンケイに連載された『逸翁自叙伝』を一本に纏めて出版。2月、『私の生活信条』を出版。6月、『私の見たアメリカ・ヨーロッパ』を出版。12月18日、大阪難波に南街会館落成開場。この月、東宝は有楽座と南街劇場に於て我が国初公開のシネマスコープ『聖衣』を独占上映する。

- 1954年（昭和29） 4月1日、宝塚大劇場に於て、宝塚歌劇40周年記念式を挙行。この月、『現代隨筆全集第23巻小林一三集』出版される。8月27日、日伊合作映画『蝶々夫人』のヒロインに宝塚歌劇団八千草薫を決定。9月8日、ヴェニス国際映画祭で東宝作品『七人の侍』は銀獅子賞を受ける。

- 1955年（昭和30） 1月15日、OS劇場は新たにシネラマ上映館として再開される。3月22日、宝塚歌劇団天津乙女以下20名はハワイ公演のため大阪を出発（4月30日帰着）。4月5日、東宝劇場再開、柿茸落公演初日、星組にて『虞美人』上演（招待日）。この月、イタリア政府よりカヴァリエーレ・ウイチャーレ勲章を受ける。6月『宝塚漫筆』を出版。9月25日、東宝社長を辞し、相談役に就任、後任社長は小林富佐雄氏。11月21日、株式会社梅田コマ・スタジオ創立発起人会を設立。

- 1956年（昭和31） 2月13日、梅田阪急ビル第5期増築工事に着手。16日、株式会社新宿コマ・スタジオ設立、社長に就任。4月2日、株式会社梅田コマ・スタジオ設立、社長に就任。

3日、宝塚映画製作所新撮影所完成。11月3日、池田市名誉市民に推選される。16日、梅田コマ・スタジアム竣工開場。12月28日、新宿コマ・スタジアム竣工開場。

-
- 1957年（昭和32）1月3日、84回目の誕生日を迎う。20日、井会の茶会を開く。最後の茶会となる。25日、午前中翌日の芦葉会のため、自らお道具を用意。午後11時45分、池田市の自邸に於て急性心臓性喘息のため急逝。法名「大仙院殿真覚逸翁大居士」。同日、正三位勲一等瑞宝章を贈られる。28日、池田雅俗山荘に於て密葬。31日、宝塚大劇場に於て宝塚音楽学校葬、葬儀委員長佐藤博夫氏、三百数十人の宝塚歌劇団生徒のほか、各界の関係者三千数百人が参列し、荘厳な音楽葬が執り行なわれた。3月8日、東京宝塚劇場に於て追悼式、21日延命会・瑞鹿会の発起により、北鎌倉寿福庵に於て「逸翁追善茶会」が開かれる。松永耳庵（安左衛門）、畠山即翁（一清）、五島古経樓（慶太）の三氏が懸釜を担当された。
-

おわりに

小林一三の実業家としての成功や文化面での業績を論じてきたが、この不世出の人物の心は常人とどこがどう違うのか、考察する。

生家の小林家は、酒造業と絹問屋などを営む地方名望家であり、また地主でもあった。経済的には恵まれた環境である。ところが、母は一三が生まれた年の八月に急逝。同じ甲州の素封家である丹沢家から婿養子に來た父は、乳のみ子の一三と幼い姉を遺して実家へ戻った。そのため一三は本家に養われることになり、二歳で祖父の立てた別家の家督を相続している。こうして「孤児同然に育てられた」ことが彼の人生観にどう反映しているのか。速断はつつしみたいが、一面ではその後の「家庭本位」「家庭第一主義」の強い主張とどこかつながりがあるようにも思える。⁷⁾

両親と幼ない時に死に別れた男の子は、成長するにつれ、父親や母親の優しさを夢想し、理想化していく。そして、人情や世情に通じた人間に成長していく。ところが、反面、他人に対しての不信感もまた増長していくのである。頼れるのは、ただ己れのみ精神力を少年時代から青年時代に確立し、護持する傾向となりやすい。そうして、一人の人間の心の中に、それは、表われたり消えたりしていく。それとは、優しさと厳しさ、温雅さと冷徹さ、庶民・大衆性と貴族性、信と不信という相反する性情が共存し、一個の人格を形成していくのである。小林一三の内面、性格はこの様にして形成されていったと思われる。当然、その事業の成功、不成功を決する判断にその精神は表われたであ

ろう。その為、美を追求した人、孤独の人、努力の人、大衆と共に歩まれた人などの印象を与えた。

世に小林一三について書かれた文献は多種多様あるが、中でも、私が小林一三の心を述べて秀逸だと評価する一文を下記に述べます。それは、名優、長谷川一夫の「小林一三」である。

「映画も事業の進め方次第で、男子一生の仕事になりますよ。まず、今までの常識を破るんですね」

そうして、先生は細部にわたって、御自身の理想と抱負を説明されましたが、私はその一つ一つに、これまで考えてもみなかった真理と若々しい情熱を感じずにおられませんでしたし、また息苦しくなるまでの芸界の古い因習のきずなから解放されたような、すがすがしさをおぼえたのでした。この人についてさえ行けば、必ず新しい自分を築くことが出来るという確信のもとに、私が先生にすべてをおまかせする気になったのは、いうまでもありません。「林さん、それには多くの苦難が伴うでしょうが、やり甲斐はありますよ」この時、別れ際に力強くそう云われましたが、その予言は意外にも早く形となって現われて来たのでした。

それは東宝入社第一回作品『源九郎義経』の撮影に入って早々、私は暴漢に顔を切られるという不祥事に遭遇し、その上、林長二郎の芸名も返上を迫られるという苦境に追い込まれたのです。長い間、売り込んできた芸名は、俳優にとってはトレード・マークのようなものだと考えるのが常識で、いまやマークのない商品に等しい私を、そのまま東宝においておくかどうか、社内でも問題になってきたのでした。ところが先生は次の一言で、社内の動揺をビタリと納めてしまわれたのです。

「東宝は、林長二郎の名前と今後を誓ったのではないよ。人そのものと誓い合ったのだ」このことを知らされて、傷心のどん底に打ち沈んでいた私は、感動のあまり声を上げて泣いたくらいです。そして同時に、私の体内に新しい希望と闘志が湧き上がってきたのです。(よし、これからは、私自身の名と実力で再起して、小林先生の御信頼に報いるのだ。どんな苦難があっても、二度とくじけまい)

そうして私は、本名の長谷川一夫そのまま、新出発の首途に立ちました。

〈中略〉

「芸は名でなく人だ！」この鮮烈な一言は、あの先生の温顔とともに、終生私の忘れることの出来ない貴重な思い出です。そして、今後も私を励まし、力づけてくれることを深く信じます。

上述の文の中に、小林一三の本当の心、即ち、家庭を大切にすること、大衆と共に生き

逸翁美術館についての一考察

る事、庶民性を愛する事などを指摘することができよう。小林一三は日本を代表する実業家であると同時に美術を愛し、逸翁美術館の所蔵作品の基礎を作った文化人でもあった。その人の経済活動と文化活動に関する社会還元は、莫大すぎて筆舌に尽くし難い。その人の意志を継いだ阪急文化財団は逸翁美術館を運営し、大衆に、庶民に、その余慶を与えつづけている。真の博愛の精神を見るようである。小林一三とは、そういう人格を持った人であり、それゆえに、今日の様な阪急文化財団等の大衆に愛され人気のある企業を創りえたのである。

図版

逸翁美術館

- (a)美術館正面 (b)美術館玄関 (c)美術館中庭 (d)展示室入口 (e)展示風景
(f)展示風景 (g)展示風景 (h)ロビーから見る中庭 (i)ミュージアムショップ
(j)マグノリアホール (k)茶室「即心庵」

小林一三記念館

- (l)記念館正面 (m)展示風景 (n)応接室 (o)展示風景 (p)茶室 (q)庭園

池田文庫

- (r)池田文庫全景

(a)



(b)



(c)



(d)



(e)



(f)



(g)



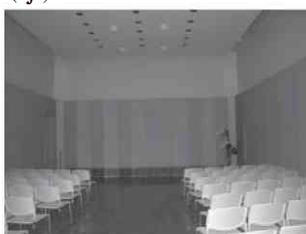
(h)



(i)



(j)



(k)



(l)



(m)



(n)



(o)



(p)



(q)



(r)



写真撮影：塩田昌弘

注と参考文献

- 1) 『小林一三翁の追想』小林一三翁追想録編纂委員会編集・発行、1961年9月15日発行
本著のp.143～p.144に「全身是れ智慧」伊藤正徳（産業経済新聞社顧問）の興味ある文章が掲載されている。
それが事業の上に現われた事績は山ほどあって、各関係者から語られる筈と思うが、見るからに、この人だナ、と感ずる印象は、その小造りの身体から万人が等しく受けた所であろうと信じられる。秀吉や信玄から武力を差引くと小林さんになる、という鑑定は何らであろうか。言い換えれば、小林一三が武力を持ってあの時代にあったならば、秀吉や信玄のような將軍になっていたろうと、私は考えている。武將にならなかったが財將として一代に名を成した。名を成した後に、多くの領土を残した。それらの領土——東京と大阪に跨がる広い経済の領土——は、小林さんが智慧を以って征服し、開拓し、領有したものである。しかも、特に血筋とか後楯とかを頼って成し遂げたものではなく、専らその頭と心によって達成されたものである。
- 2) 『逸翁美術館インフォメーション』小林一三と逸翁美術館について
- 3) 『小林一三全集』第一巻、新茶道、七 文化財保護法をめぐる、p.536～p.537、小林一三著、発行者鈴木津馬治、発行所ダイヤモンド社、1961年11月5日初版
- 4) 『逸翁美術館インフォメーション』逸翁美術館蔵品について
- 5) 『小林一三翁の追想』小林一三翁追想録編纂委員会編集・発行、1961年9月15日発行
本著のp.198～p.199に「逸翁奇智」橋本凝胤（薬師寺管主）が集録されている。
- 6) 小林一三の業績、年譜については、下記の文献を参考、引用した。適宜、塩田が原文の不必要と思われる箇所を削除した。
 - ・『逸翁自叙伝—青春そして阪急を語る』p.268～p.303、1979年（昭和54）7月20日初版発行、著者 小林一三、発行 阪急電鉄株式会社
 - ・『小林一三翁の追想』p.659～p.686、1961年（昭和36）9月15日発行、編集兼発行者 小林一三翁追想録編纂委員会 佐藤博夫、印刷所 凸版印刷株式会社
 - ・『小林一三日記（一）』1991年（平成3）6月20日発行、発行者 阪急電鉄株式会社、製作 文藝春秋
 - ・『小林一三日記（二）』1991年（平成3）6月20日発行、発行者 阪急電鉄株式会社、製作 文藝春秋
 - ・『小林一三日記（三）』p.743～p.771、小林一三年譜、1991年（平成3）6月20日発行、発行者 阪急電鉄株式会社、製作 文藝春秋
- 7) 『宝塚戦略—小林一三の生活文化論』著者 津金澤聰廣、p.109～p.110、発行者 野間佐和子、発行所 講談社、1996年（平成8）5月23日発行
- 8) 『小林一三翁の追想』小林一三翁追想録編纂委員会編集・発行、1961年9月15日発行
本著のp.514～p.516に「小林一三（こうちょうせんせい）」長谷川一夫（俳優、大映取締役）執筆。文中のアンダーラインは塩田が引いた。

◆本論執筆にあたり、逸翁美術館・小林一三記念館・池田文庫の学芸課長仙海義之先生に、資料等の収集について御協力を賜りました。厚く感謝の意を表します。